



Title	ベルクソンにおける身体の問題
Author(s)	鶴田, 博之
Citation	カルテシアーナ. 1982, 4, p. 25-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベルクソンにおける身体の問題

鶴田博之

序 身体の問題の多面性

身体に関するベルクソンの論及がまず問題にされ一般に評価されるのは認識論のレベルである。とりわけ「運動図式」[le schème moteur]の概念は、メルロ＝ポンティの「身体図式」[schéma corporel]に受け継がれるものとして、その知覚作用における能動的な役割が注目される。ベルクソンにあって、具体的な生ける知覚は単なる受動的なものではなく、記憶の内から現在の状況に応じた意味や観念を選び分けて想起するという能動的な意味賦与の働きを含んでいる。それは主体の行動への身構えといったものの働きであり、その際、知覚に関して習慣化された身体の「感覚―運動」機構によって与えられる運動図式の設定が、身体を何よりも行動という世界との関わりにおいて捉えたものとさ

れるのである。⁽¹⁾

運動図式とは、知覚対象の再認にあたって現在に現れる記憶を選択する枠組となるものである。この理論は『物質と記憶』の中で特に言葉の聴覚的再認に関して提唱される。我々が人の語る言葉を聞く時、聴覚の印象は、聞こえてくる語句を分解してその主だった分節を印づけることのできる生まれかけの運動を発声節に組織するという。始めは漠然として無秩序なこの自動運動は、繰返されるにつれてはつきりと単純なものになる。耳が慣れるとはこのことである。その時、意識の内には、生まれかけの筋肉感覚の形で、聞かれる言葉の運動図式と呼ぶべきものが展開されるというのである。⁽²⁾

一般に知覚は必ず身体のならぬ自動的反作用を伴う——逆に言えば身体の反作用を伴うもののみが知覚される——というのがベルクソンの主張である。この反作用は、たとえ完遂されずとも、生まれかけの運動あるいは運動への傾向として現れる。意識はこれを対象そのものの図式、つまりは適当な記憶に満たされてできあがる判明な知覚の図式として捉える。過去のすべての出来事のあらゆる細部を「日付をもって」物質から独立して保存する自発的記憶の形像は、精神の積極的な努力によってこの図式に飛び込みつつ、図式の描く対象の輪郭に様々な細部や彩りを加えるのである。この意味で、図式と判明な知覚との関係はスケッチと完成された絵画とのそれにたとえられ、また図式とそこに入り込む記憶形像とは空の器と液体などになぞらえられる。運動図式は現実化する記憶の領域を決定する動く枠である。それは他所では「不斷に変化しながらも常に準備されている運動的枠組 le cadre moteur」⁽³⁾とも呼ばれている。

生ける知覚に必要な運動図式をもたらずのは、先の発声筋の運動ばかりではない。ベルクソンによれば、文字の視

覚的再認には、文字を構成するような連続線を自分で一気に描く能力が必要である。こうした模倣運動 *mouvement d'imitation* の成立は身体の習慣に依存する。この点で、運動図式の設定は行動へと身構える身体を知覚認識の不可欠な条件とすると言える。認識論での身体の役割は極めて大きなものとなり、知覚世界と身体との関わりが問われることとなる。

しかしながら、運動図式の理論でより重要なのは身体の側ではなく、図式に様々な記憶を送り込む精神の働き方の問題である。そこには記憶の全体が前提されており、再認の過程とは、潜在状態にあるこの全体から精神が自己を限定しつつ現実化する過程である。したがって、身体の問題をベルクソン哲学の全体の中で捉えようとするなら、問題となるのは、記憶の全体という精神実在と身体との関係である。そしてこの時、身体の評価はむしろネガティブなものに見える。運動図式の理論はもともと記憶の脳局在説に対抗して持ち出されたものであって、脳の役割を身体の運動にとどめ、記憶や精神がそこから独立に存在することを主張するものである。「物質性が我々の内に忘却を置く」⁽⁵⁾のである。身体の行動に関わり行く時、精神の現れは自己を限定することになる。この意味で、ベルクソンのスピリチュアリズムにあつて身体は生命の対極をなす否定的な概念であると言えるのである。

問題は生命である精神に対しての身体の物質性にある。その顕著な例が『笑い』に見られる。我々にとって、生命が連続する進行であり、後戻りや繰返しをしないものとして現れる一方で、物質とは無限に繰返され得る機械的自動現象である。生命の柔軟さが外に現れた時に優美さは生まれ、また生命の自由は時として深刻であり、劇的で厳かな様相を与えるという。反対に、我々の注意が身体の物質性に及んだ時、とりわけ精神的なものが問題になっている際に注意が身体に向けられた時、それはおかしさとなる。ぎこちないもの、固定したもの、機械的な自動現象、繰返さ

れるもの等は滑稽である。⁶⁾『笑』は生命の流動を覆い隠す物質性が人間の身体、精神、性格に及んでこれらを滑稽なものとする様を分析している。本来は生命的であるはずのものが物質的である時、おかしさは生じる。物質性を担う身体は我々には「重くて邪魔な外皮」であり「厄介な荷」にすぎぬのであろうか。

我々はこうした問題をベルクソン哲学の発展を追って見ていこうと思う。最初の著作『意識の直接与件に関する試論』では、純粋な自我は内的自我、深い自我と呼ばれ、その在り方は純粹持続の名を冠せられる。一方、我々の問題にしようとする身体性の概念は、空間性や社会性と共に「表面的自我 le moi superficiel」に包括されると思われる。全体が不可分なままに有機的發展を遂げる質的継起として規定される純粹自我に対して、表面で外部世界に触れる表面的自我は空間的、社会的なものである。明確である代りに非人格的で「その存在の諸瞬間は区別され、その諸状態は互いにはなればなれで、容易に表現され得る自我」である。⁷⁾それはむしろ深い自我の外的投影、色あせた亡霊であるが、その肥大現象によって、我々の真の自由を社会生活の便宜のために妨げるものである。自我の物質性、身体性はここでも生命の自由に対立する。

しかしながら『直接与件』は身体を積極的に論ずるものではない。意識の純粹な在り方を追求するにあたって、それを覆い隠す外的自我は実在認識の妨げでしかないが、身体もまたその限りで言及されるのである。哲学が『形而上学入門』で述べられるように、⁸⁾まず意識の在り方をモデルとしてあらゆる実在を表象しようとするものであるなら、日常的認識につきまとう身体性は、まず打ち捨てられるべきものである。『直接与件』の記述はこの障害との苦闘の跡であり、空間を通して時間を見る日常の身体的認識の批判を導きの糸としていえると言えよう。

このように概観するならば、ベルクソンの身体への論及は三つの面を持つことになる。まず第一に、身体を形而上

学の障害とする面である。哲学の方法として、実在は身体的なものの彼方に求められなくてはならない。第二に、認識作用における身体の役割である。ここでベルクソンは最も積極的に身体を論ずる。そして第三に、生命や精神に對立するものとしての身体の規定であるが、ベルクソン哲学において身体はこのように否定的概念のままに終わるのであろうか。この点について、我々は先の二点をより詳細に検討し、その成果をもつて、ベルクソンが身体に与えた価値を問ひ直そうとするものである。そしてその際、身体概念の發展と共に、ベルクソン哲学の核心である精神性の概念もより明らかになるであらう。

I 形而上学の方法と身体

まず始めに、形而上学を構築する上での障害となる身体の一面を考察することにするが、この点についてのベルクソンの論及は必ずしも直接に身体を名指すものではない。直接の障害は等質的空間の觀念であり、行動の要求であり、知性的認識である。しかし我々はここで身体を核に据えることにより、ベルクソンの方法論の發展の一側面に光を当て得ると思うのである。

『直接与件』は、本来は質的なものである心理状態の変化を量の変化に取り違える錯覚を批判する。たいていの意識状態の変化には身体的徴候 *symptômes physiques* が伴う。努力感、激しい情動、感情感覚 *sensation affective* 等には、それに関係した身体部分の広がりに伴い、その程度が意識状態自体の量的解釈や計測を許すのだという。心の在り方を探る上で、ここでの身体の障害は明白である。感覚について詳しく見てみよう。ベルクソンによれば、感覚にお

いて意識されるのは外的原因の分子運動ではなくて自己の身体の運動である。感情感覚を生じさせるのは「受けとめた刺激のままに従おうとし、その運動の自然的な延長となると思われる自動的運動」⁽⁹⁾である。快感や苦痛の存在理由は、こうした自動的反作用への抵抗である。そしてこの反作用の身体上での広がりを感じ量を量として扱う錯覚を与えらるゝのである。感覚における身体の反作用へのこの着目は、さらに身体的徴候を持たぬ表象感覚 *sensation re-présentative* の分析にも及ぶ。純粹な表象において我々は、経験知により、感覚の外的原因の量を結果の質の中に持ち込む習慣がある、とベルクソンは言う。⁽¹⁰⁾ 例えば音の感覚は、同様の音を引き出した過去の努力の観念によつてその大きさが計られる。熱や重さも同様である。つまりこうした場合、我々の身体が潜在的に働くわけである。この点が『物質と記憶』の知覚論に引き継がれることになるのだが、いずれにせよ、感覚には身体の運動が伴い、その身体が空間内に広がることから、それは心的状態の質的な在り方を知る上での妨げとなると言えるのである。

これに対し、身体的なものから離れた純粹に心的な状態の変化が量の変化に置き代えられる原因は、あまりはつきりと示されてはいない。ただ、反省的意識が言葉や区別や明確な輪郭を好み、そうした区別がまた社会的な実生活では有用である、と言われるだけである。⁽¹¹⁾ 悟性の持つこの区別への傾向が行動の要求に由来することを示すのが『物質と記憶』以降の仕事である。ベルクソン哲学の發展は、同時にまた形而上学の障害となる思考習慣の追求でもある。

『物質と記憶』第七版序文は自身の哲学の二つの指導原理を挙げている。まず、心理学的分析を行動へと向けられた心的機能の実利的性格に基づかせること、そして、形而上学を行動の中で身についた習慣が思考の領域で作り出した偽問題の曖昧さを一掃することから始めねばならぬこと、である。⁽¹²⁾

行動への関心が思考にもたらす悪弊については、まず過去の存続に関して触れられている。行動のための有用性は

時間よりも空間を優位に置く。行動は、無限な空間内に可能な対象が存続することを期待するが、一方、過去の記憶については、それは知覚に重なる有益なものを除けば現実に夢を混ぜるだけのものであるから、捨て去ったつもりでいた方が都合が良い。「我々の前に無限に空間を開く同じ本能がまた我々をして、時間をそれが流れ去るにつれて我々の背後に閉ざしめる。」¹³しかしベルクソンにあつては、単に有益であることをやめたにすぎぬ過去はその全体が存続する。有益なもののみが現在の意識に現れ、他は無益で無力なものとして潜在的状态にある。行動という実践上の要求を超えたところに、ベルクソンはすべての過去の存続を設定し、これが現実化する運動に実在の姿を見ようとするのである。

『物質と記憶』は、こうした観点を『直接与件』にまで遡及する方法として打ち出している。実生活と言語に歪められた現実との接触を回復する方法は「経験を源まで、あるいはむしろ経験が我々の実用性の方向に屈折して正に人間の経験になる曲がり角の上に、求めに行くこと」¹⁴である。直接的なもの *l'immediat* が有益なもの *l'utile* に移る、この過程を捉えた時、哲学に残された仕事は、その背後の闇に広がるものを再構成することだという。

この方法は、精神だけではなく物質に対しても向けられる。物質世界について、直接体験されるものは分割不可能な連続であり、宇宙全体の持続である。これを独立した物体に分割することは行動のための作為である。生物の様々な欲求は、自己の身体の傍に、求めたり避けたりせねばならぬ諸物体を区別させるのであり、そしてこの区分が我々に物質よりも物体を表象させるのだとベルクソンは言う。¹⁵こうして生活の要求を引き受けた思考は、「内的連続から生まれた生きた統一」に代えて「空虚な枠組による人為的統一」を置く。等質の時・空間がそれであるが、身体的認識の環境とも言うべきこれらについては、次章で詳しく述べることにする。

知覚・知性・科学を行動のためのものとして、實在を捉える直観に対立させるのが『創造的進化』である。我々が思考するのは本源的には行動するためではない。知性の機能は、我々の行動を照らし、事物に対する我々の行為を用意することである。それ故、知性の対象は無機的固体、非連続、不動性であつて、自らの自然な方向を逆転させて自己自身の上に身を曲げぬ限り、知性は創造的進化の連続性、動性、相互浸透を考えることはできない。物質についても同じである。生成の連続の中から、知性は状態という不動のものを表象する。「我々の活動が行為から行為へと飛び移るためには、物質が一つの状態から状態へと移るものでなくてはならない」からである。その後知性を取り戻そうとする運動や連続は、實在から切り取った不動のものの並置的なつながり合わせではない。

こうして知性には不動のものを介して運動を考える習慣がしみついてゐる。この行動の要求を超えることにベルクソンの方法は存する。存在を直接に考える習慣をつけなくてはならない。「ここではもはや行動するために見るのではなく、見るために見ようと努めねばならない」¹¹⁷。哲学するとは正に思考の働きの習慣的な方向を逆転することであると、ベルクソンは言うのである。

まず心的ものの在り方を探ろうとするベルクソンにとって、身体は始めから切り捨てられねばならぬものだったに違いない。しかし精神的なものへの身体的なものの混入は単純なものではなく、この点が逆に明らかにされて行く。意識の持続から記憶を経て生命に、具体的なものから本質へと形而上学が發展するにつれ、その障害となる身体の入も、単にそれが空間内に広がることから、行動という身体生活へとつきつめられて行くと考えられるのである。今や我々は空間の観念や行動の要求が、いかにして直接に身体と関わるかを知らねばならない。

Ⅱ 認識と身体

ここでは認識論での身体の役割を、まず記憶や観念の想起に関して、次いで知覚世界との関連の中で見てみよう。最後に等質的時・空間の概念をも検討する。

ベルクソンにあつて通常の知覚は既に記憶を含む再認である。そして再認の基礎には身体の習慣的行動がある。日常的认识を行動に重きを置いて見るベルクソンの観点は、条件反射の如き身体の運動をも再認の名で呼ぶことに顯著である。日常の対象を再認することは特にこれを用い得ることにあり、そして用いることができるのは、それに順応する運動を下書きすること *esquisser* であり、ある態度を取ること、少なくともその傾向を持つことであるとベルクソンは言う。環境へのこうした適応が生命の一般目的だとも言っている。¹⁸そしてこの自動的再認が、記憶の介入する知的再認の基盤ともなるのである。

知的再認は、身体の側の自動作用と精神の側の努力という、二つの逆向きの流れの合流点に成り立つ。無益で無力な過去の記憶は、生活のために余計な現れを抑えられながらも、現在の形像と化す機会を窺っている。精神の注意が身体の運動を生まれかけの状態にとどめる時、過去のうちでこの身体の行動に協力し得るものが形像となり得るという。現在の知覚に似た形像、知覚をより判明にする形像が容易に現実化する。この意味で、身体の習慣が記憶の現れの枠を決定し、この枠が運動図式と呼ばれることは既に見た通りである。

もつとも、身体の役割はそこまでであり、ベルクソンのより大きな主張はそれ以降にある。現実化する自発的記憶の形像は様々であり、その多彩さは精神の活動に依存している。その記憶の深みは生活への注意と呼ばれるものに応

ずるのである。対象の細部へと次第に深まりゆく再認は、それ自体が一つの回路のような再認の働きを、そのつど古い回路を包む新しい回路として構成する努力を要求する。¹⁹

こうして再認の過程で主役を演ずるのが精神であるとはいえ、様々な可能性を持つ多彩な記憶も、身体の指示なしには現実化し得ないことに変わりはない。「記憶は、現実化するために運動的補助を必要とし、呼び起こされるために自ら身体の状態に入り込んでいる精神的態度を要求する。」²⁰このことは、再認以外の記憶の想起についても言い得るであらうか。

記憶は通常、現在の行動によって、それに関わるものを除いて現実化を抑えられているが、我々の生活への注意が減退し、感覚を運動へと結ぶ神経系が緊張をゆるめた時、かなり自由な現れを見せるものである。ベルクソンによれば、夢はその例である。夢に現れる記憶は身体に無関係であらうか。『精神力』には夢を扱った興味深い講演録が収められている。それによれば、夢とは、現実の知覚と同様に記憶によるものである。そしてここでも、記憶の現実化には何らかの現実の原因が必要である。実際に音が聞こえたり、光や網膜上の斑点が見えたり、または身体が何かに触れたりしていなくてはならない。そこからより主観的なものを取り出されるにしても、感覚は閉ざされてはいないのである。色や音の形像^{イマジネーション}となつて物質性を身につけようとする幻影記憶 *souvenirs-fantômes* のうちで、実際に知覚されている色や音に同化されるか、身体組織の印象の構成する一般的受動状態に調和するものだけが、それに成功するという。²¹夢のメカニズムは現実の知覚とほぼ同じである。逆もまた言い得る。我々が日常、文章を速読できるのは、記憶が知覚にとって代り、解釈を進めているからだという。我々は事物の素描を知覚するのみであり、実際に現れるのはほとんどが記憶である。²²

こうして夢を知覚と区別する必要がないならば、我々の問題もまた、対象との対応を離れた記憶や観念の想起に及ばねばならない。表象と身体との関係は『物質と記憶』では主に知覚・再認に関して論ぜられるが、それに限られるものではない。例えば概念を構成したり、一般観念を引き出したり、抽象的な推理をするといった知的な働きにも、身体 of の少なくとも潜在的な行為が必要だという。「観念は、生きたものであるためには、何らかの側面で、現在の現実に触れなくてはならない。」すなわち「精神によつて表象されると同時に、身体によつて多少とも演ぜられ得なくてはならない。」²³推理などの思考も、少なくとも生まれかかった形像^{イマージュ}を必ず伴うものであり、そしてこの形像^{イマージュ}自体が表象されるためには、身体に何らかの態度を印づける行動が素描あるいは傾向の形で描かれなくてはならない、とベルクソンは言っている。²⁴

身体に演ぜられることによつて観念は現実化する。このことは既に『直接与件』にも断片的に窺われることである。²⁵それによれば、芸術の目的は感情を表現するというより、それを我々の内に起こさせること、あるいは観念に富む感情の暗示である。芸術家は、自分の感情の外的な現れのうちで我々の身体がわずかでも機械的に模倣するようなものを固定して、それを引き起こした心理状態の中に我々を連れ込むものだという。例えば音楽の表現能力、暗示能力は「聞こえた音を我々が内的に繰返すことにより、それらの音が出て来た状態、すなわち、表現はできないが我々の身体を取る運動が暗示する元の状態に、自己を置き直すことによつて、はじめて理解される」というのである。²⁶

このように、身体は現在に現れ出る記憶や観念の指標である。同様な身体の状態には、まず同様な記憶が現れるであろう。ベルクソンにあつて、対象の意味はまず身体によつて与えられるとも言えよう。知覚と記憶の想起とのこのメカニズムをもつて、ベルクソンは認識論上のある重要な問題を説明している。一般観念の問題がそれである。

明確な類の概念と明確な個別的対象の知覚とのいづれから出発しても、一般観念の問題は解明し得ない。我々の知覚は始めからはつきりした個物を捉えるものではない。個別的対象の明確な区別は知覚の贅沢品であり余剰品である。知覚の最初の所与は個物でも類概念でもなく、対象の目立った性質あるいは類似の漠然とした感じである。この類似はまだ知覚されたり思考されたりしたものではなく、客観的に力として働く類似、感ぜられ生きられ、そして自動的に演ぜられる類似である。抽象作用や一般化作用は、まず思考されるよりも体験される。それは、馬が草一般を見分けたら、植物が土から養分を抽出するように、同じ結果をもたらし得るものの弁別である。類似とは、我々の身体に同じ反応を起こさせ、同じ態度を取らせ、同じ運動を始めさせる共通な特性である。こうして得られる一般性から、一方で更に識別を事とする記憶がこれに様々な意味を加えて独自の個物として知覚し、他方で知性による洗練すなわち反省的分析がこれを一般観念にまで浄化するという。一般観念の起源にあるのは「状況の多様における態度の同一性」であり、一般化とは「行動の領域から思考の領域へと遡る習慣」にほかならない。²⁷

このように、身体の指示に記憶が彩りを加えるという具体的知覚の過程そのものによって一般観念の問題は解明される。こうした知覚の身体性に基礎を置く一般観念は、他のあらゆる一般観念の形成のモデルとなる。知覚を導く「行動の利害によって導かれ、我々の身体が素描する、生まれかけの反作用」こそは「形成されようと熱望する潜在的な類」²⁸なのである。ベルクソンにとって知覚認識作用は何よりもまず行動のためのものであり、この行動を担う身体を度外視して認識を論ずることは不可能である。

このように身体は記憶が物質化して現在の知覚と重なるための媒介であり、精神の現実化の手段である。知覚や夢の表象を記憶によって構成するベルクソンにあつて、記憶の想起を指示する身体役目は極めて大きいと言わねばな

らない。ところで、この身体は静的なものではなく、行動する身体であり、運動機構を身に備えて常に外界に対して身構える身体である。記憶の想起における身体の不可欠性を強調する余りに、我々はこれまで身体を世界から切り離して考えてきた。目を物質界に転じ、知覚世界と身体との関係を見てみよう。

ベルクソンにとって、知覚は既に解釈であり、記憶に覆われている。現在の知覚は、古い形像イマージュを喚起するための指示または記号にすぎない。²⁸しかしベルクソンは、この具体的な知覚から記憶をすっかり取り去った、物質だけの世界に属する「純粹知覚 *la perception pure*」を理論的に設定することによって、物質界の中での知覚の意味を捉えようとするのである。

知覚を論ずるにあたり、まずベルクソンは物質を形像イマージュと呼ぶことによって、その実在性の論議を避ける。事物は、常識が認めている通りに、それ自体で存在し、しかも知覚されるままに生き生きとした対象である。かかる形像イマージュの全体が物質的宇宙である。事物とは形像イマージュであるが、しかしそれ自体で存在する形像イマージュである。こうしてベルクソンは物質から、知覚されるものを超える神秘を消し去るのである。²⁹

事物をこのように捉え、そして純粹知覚という瞬間的な世界を想定するならば、在る形像イマージュが知覚された形像イマージュとなるためには、ある部分や側面だけが示されるという減少の論理だけで事足りる。この減少すなわち「表象のための形像イマージュの選択」は、身体によってなされる。ここでベルクソンは知覚を、光の全反射が作る虚像や蜃気楼にたとえる。周囲の対象からの働きかけのうち、身体に関係のないものは素通りし、身体に利害を持ったものだけが反射して、像すなわち知覚を形成する、というわけである。しかし、こう言っただけでは不十分である。それが現実的作用を引き出す

ものであるなら、知覚として表象されないからである。知覚となるのは、不確定の領域である我々の身体の活動性に利害を持つものだけである。現実的作用 *action réelle* は無意識にとどまる。単に可能な反作用を反映するものが知覚となるのである。別のたとえを持ち出すなら、知覚とは写真機の乾板の後ろに置かれた黒幕に浮き出る像である。我々の不確定地帯はこの幕の役割をし、受け取られた興奮の一部を機械的に伝えずに、未決定のものとしてとどめる。知覚はここに生ずるのである。

このように見るならば、知覚論は再認論に裏付けされることがわかるだろう。ベルクソンによれば、脳の損傷が「感覚—運動」過程にある活動性すなわち不確定領域を冒す時、対象が身体に可能な運動を引き起こし得ないが故に、知覚は減退する。対象が活動性に対して無力になるのである。この無力にこそ無意識があるという。この場合、判明な知覚を成立させるための運動図式が冒されると言ってもよからう。また、固定的な習慣が獲得されるなら、今度は活動性への呼びかけが意識され得ない。ここでは対象が表象されないままに自動的再認がなされるであろう。呼びかけは活動性にとって無益である。³¹

したがって、それ自身で在る形像^{イマジネーション}を知覚対象へと選ぶ身体の可能的運動とは、意識に運動図式をもたらず潜在的運動である。ベルクソンの言う可能的行動 *action possible* とは、厳密に言うなら潜在的行動 *action virtuelle* であり、生まれかけの行動 *action naissante* である。こう見ることによって我々はベルクソンの知覚論における身体の能動的な役割を明確に捉え得るのである。ここでの身体とは、生きることを経験し、運動機構を身につけてきた身体である。知覚される形像^{イマジネーション}の選択は、この運動機構を発動させ得る対象を身体が意識の前に限定することにあると言えよう。そして知覚作用とは、純粹記憶が身体の行動を介して物質化し外的な形像^{イマジネーション}と化すること、言ってみれば、精神が身体を介

して、知覚の成立するその場において、物質世界に結合することなのである。³²

ともあれ、純粹知覚論は知覚を物質世界の内のみで考察し、知覚されたものと身体との関係を追求することによって、知覚の行動的な存在意味を規定する。知覚とは「生物と、それに利害をなす対象が様々な距離から及ぼす影響との間の変化する関係³³」である。必然的なものは知覚されないから、知覚は後続する行動の不確定性の正確な尺度をなす。知覚とは本質的に行動のためのものである。そして、行動のために實在の背後に置かれた図式が、時・空間という等質的環境である。それらについて、ベルクソンの言う所を検討してみよう。

何よりも時間を追求する『直接与件』では、直接に体験される意識の変化が眞の時間変化を示すものとされる。眞の時間はそれ故に区別を欠いた継起であり、その変化は全体の質的変化である。諸要素の相互浸透、相互連帯、内面的有機化として特徴づけられる時間は、しかしながら常に空間を介して時間を見る悟性の習慣によって見誤られる。等質的空間内に広がる外的世界の継起なき相互外在性と、我々の内部の相互外在性なき継起とが、妥協によって内外の双方に等質的時間を生み出すとベルクソンは言う。³⁴ 等質の時間は同時性であり、第四次元の空間にはかならない。ところで、こうして空間が時間を見誤らせるのは、その等質性による。しかし、この空間の等質性自体の起源について『直接与件』は触れていない。ここではただ、人間の知性のみが等質的空間を知覚あるいは理解する特別の能力を持つ、とされるのである。そしてこの能力が我々に区別を行うことを可能ならしめるのだとも言われる。³⁵

等質的空間の觀念の起源を行動の要求に置き、空間を我々に直接的な広がりから区別するのが『物質と記憶』である。知覚は行動のために、物質的宇宙から当面の対象を浮き上がらせ、はつきりとした輪郭をそれに与える。しかし、こうして行動が及び得るものに實在を区分するためには、既に實在を任意に区分できることを我々が納得していなくて

はならない、とベルクソンは言う。知覚の存在理由である行動の要求が、具体的延長物に対して無限の分割を求めるのである。「単に概念されるだけのこの基体、任意で無限の分割可能性のまったく観念的なこの図式が、等質的空間である。」⁸⁸

『創造的進化』は、知性による等質的環境の思考を行動に結びつけて、その発生を示す。ここでも等質的空間は行動の図式である。知性はこれを、物質の上に投げかけると行動の要求のままに物質を分割する網として用いるという。そして、この空間表象を知性が手に入れる過程を、ベルクソンは意識の弛緩をもつて説明するのである。緊張した意識は質的な多様性の内にある。これが弛緩すると、その諸要素は次第に並置的な広がりの方角に向かう。これが空間についての暗黙の表象となり、この後、空間は事物の内に改めて発見されるが、そこで物質によって与えられた衝動によって、精神は究極において純粹空間という図式に到達する、というのである。⁸⁹空間性、物質性の表象は、まず自己の意識の弛緩に発する。そしてこれは知性の機能である。知性は惰性的な物質の間ではくつろいでいられるという。こうした観点からベルクソンは、空間内に広がる事物の物質性と知性とを、同時に創造されたものとするのである。「意識が知性化すればするほど、物質はますます空間化する。」⁹⁰空間は、物質の中での行動のための、知性による図式である。

精神の活動である記憶や観念の想起に身体は不可欠のものであり、知覚はまず身体によって対象を限られる。そして空間の観念もまた行動の要求に基づくものである。こうしてベルクソンの認識論に占める身体的位置は極めて大きなものであると言える。しかしながら、ベルクソン哲学にとってより大きな価値を持つのは、記憶全体という精神の

實在であり、生命である。この精神や生命についての身体の価値を問わずして、ベルクソン哲学における身体の意義は解明され得ないのである。

Ⅲ 存在と身体

精神の働きには身体の指示が必要であるとはいえ、精神の存在は身体の条件を超えている。ベルクソンにあって記憶は、身体に関わりなく、その全体が在るのである。そして記憶の現実化は精神自体による意識全体の膨張、拡張の努力による。記憶の全体は、現在からの呼びかけに、同時に二つの運動によって答えるという。「一つは公転運動であり、これによって記憶は経験の前に全体が赴き、行動のために、こうして分かれたることなく多少とも収縮する。もう一つは自転運動であり、それによって記憶は現時の状況に方向を取りながら、最も有益な面をそれに差し出す。」³⁹精神生活と身体とのこうした関係はいかなる意味を持つであろうか。

問題はこういうことである。意識の持続、全過去の記憶といった實在は、身体を超えたところに求められた。しかし記憶の実際の働きは多少とも身体を契機とする。一見相反するようなこの二つの面が、ベルクソンにあってどのような内的関連を持つのか、ということである。あるいは、ベルクソンの追求する精神實在の姿が、著作によって変貌しているであろうか。

『直接与件』によれば、自我は心的事象の表面的な層を自己の調整者 *regulateurs* として用いるという。そしてこれを取り去った状態が夢であり、そこでは持続が計測されずに感ぜられるものとなり、量から質へと立ち返ると言われる。⁴⁰

精神性や持続とは、行動や身体を全く離れてあるのだろうか。『物質と記憶』では意味合いが少し違ってくるように思われる。そこでは、身体は我々の精神を定着させるもの、精神に底荷と平衡を与えるものとされる。⁽⁴¹⁾ 知的平衡の説にこの意味を探ってみよう。

純粹状態の発明家と呼ばれるほどにベルクソンは、論理の方法として、現実状態を相反する二つの方向に極限化することを好むが、精神生活の在り方についてもまず両極端を挙げている。純粹な現在の中に生き、自己の運動習慣にそのまま従う衝動的人間は、意識を持った自動人形である。反対に、現在の状況に関わりのない思い出の中に生きる者は、行動からはずれた夢見る人である。両者の中間には、真の意味での行動人があるという。それは「現在の状況の輪郭に正確に従うためには十分に素直でありながら、他のあらゆる呼びかけに抵抗するには十分に活動的な精神」であり、これこそが「生活に完全に適合した人間の在り方」なのである。⁽⁴²⁾

これは単にベルクソンの倫理観を示すだけのものではなからう。真の精神性、真實在たる純粹持続の概念が、この主張の中に示されると思われるのである。鍵となるのは、衝動的人間と夢想的人間の双方が拒否される点である。

衝動が拒否されることは自明である。外からの刺激に一定の仕方では下等動物の特性であり、瞬間的な現在の中に生きることである。絶えず自己を繰返すことは物質の特徴であり、身体の物質性は我々をかかる同一行動へと誘うであろう。

しかし、他方で夢に対してもベルクソンの態度は厳しい。夢は何ものも創造しない。夢には努力がないからである。夢とは、心的生活全体から集中の努力を取り去ったものである。夢見る自我は「安心して弛緩した自我」⁽⁴³⁾である。この時、自我は互いに外在的な記憶へと分散してしまう。

つまり精神性とは集中の努力である。「純粹持続における我々の進行の意識を持てば持つほど、我々は自己の人格全体が絶えず未来を開きながら、これに入り込んで行く一つの点あるいはむしろ一つの尖端に集中するのを感じる。ここに自由な生命と行動がある。」⁴⁴ここで、人格を形成する全過去が集中するのは、ベルクソンがよく用いる円錐形のイメージに示されるように、身体の態度に向けてのことである。純粹持続の概念が示すものは、単なる過去の静的な存続ではなく、現実に向けてのその不可分な集中であろう。そう見るならば、ベルクソンにあつて身体は決して否定的なものにはならない。身体は単に記憶の現実化の手段であるにとどまらず、純粹持続、自由、創造という精神性の支柱ともなるであろう。

しかし一方で、身体そのものは物質であるという問題は依然として残る。その解決のためには、緊張 *tension* と弛緩 *détente* というベルクソン独自の観点から成る精神性 *spiritualité* と物質性 *matérialité* の意味を知らねばならない。

純粹知覚に記憶形象が重なる具体的知覚の成立は、物質と精神との結合の問題を提示する。従来の二元論の如くに両者を延長と非延長、量と質として真つ向から対立させては解決不可能なこの問題に対し、ベルクソンは独自の視点から両項の接近を図る。まず、具体的知覚の所与である不可分な広がり *l'extension* を分割可能な延長 *l'étendue* から区別し、また観念が形象化⁴⁵によつてこの広がり⁴⁶に到達する移行を認めて、精神を純粹な非延長 *l'inétendu* とは考えないなら、具体的知覚において現に物心の結合は可能である。また一方で、精神の質を、多数の瞬間を唯一の直観に収縮することから生じるもの、物質的量を各瞬間ごとの同等な繰返しから成るものとするならば、質と量とは、そこに集約された時間や記憶の多少による、相互に移行可能な程度の差のみを持つことになるのである。⁴⁶これは、いわば存在の精神性と物質性との時間的な差異である。物質の必然、精神の自由もここに由来する。ベルクソンによれば、物質も全体

として見れば流れであり、持続するものであるが、そのリズムは我々の持続のリズムとは大きく隔たる。受けた刺激にそのまま従って行くのは物質のリズムに従うことである。自由は、対象を自己のリズムに取り込む精神による独立性に存する。そしてこの独立性とは「存在が事物の流れのリズムから解放され、より深く未来に作用するためにまず過去を保持することを許す内的な力」すなわち記憶の働きにあるのである。

精神と物質とを別の実体として対立させるのではなく、こうして一つの現実存在が精神性にも物質性にも傾き得るならば、ここにこそ我々の身体の問題があるであろう。『創造的進化』は生命と物質という規模でこれに回答する。それによれば、我々の担っている物質は、生命の流れがその途上で運んで来る実質の凝固した部分である。生命の進化は形態の創造であり、同時に、創造の流れの瞬間的な中断によって物質が創造されるといふ。ベルクソンは生命を、落下するおもりを持ち上げる努力にたとえるが、この努力の噴流のひとつひとつが落下してできたものが物質的世界である。物質世界は壊れて行く創造的動作である。「もし生命が純粹な意識、ましてや超意識であつたなら、生命は純粹な創造的活動であるだろう。実際には生命は一つの有機体に釘づけにされており、この有機体は生命を惰性的な物質の一般法則に服従させる。」⁴⁶身体は我々の存在の物質性として、生命の原理に反するものである。自動作用が自由を窺っている、とベルクソンは言う。⁴⁷

身体はこの自動作用はいかにして乗り越えられるだろうか。ベルクソンはそれを、いかなる運動習慣をも身につけることのできる人間のみに可能としている。必然からの脱却はメカニズムを乗り越える新たなメカニズムを作りあげることにあるからである。人間の脳の整備し得る運動機構の数は無限であり、無制限である点で、他の動物たちと異なり、両者の間には開かれたものと閉ざされたものとの差、程度ではなく本性の差がある、とベルクソンは言っている。

る。⁵⁰

同一反復行動へと傾く身体の物質性は、諸多の運動機構を備えた、いわば生ける身体によって乗り越えられるであろう。ところで、こうした身体観は既に意識的知覚に不可欠とされていたものである。身体が一つの運動機構によって自動的反作用に陥るのを他の機構が抑えることにより、意識的知覚は可能となろう。この知覚への記憶や観念の集中が、精神性を示すものであった。身体は、瞬間的世界の中で我々を同一行動へと向かわしめる傾向において、我々の存在の物質性として精神的な活動の妨げとなると同時に、諸多の機構を身につけて行くという創造行為の中で捉えるならば、外的には一つのメカニズムを乗り越え、内的には多くの過去を収縮させ新たな創造の自由を可能とする、精神の独立性を実現する手段ともなるのである。

純粹持続、純粹記憶といった理想型を案出しながらも決して現実を離れることのないベルクソンにとって、物質は生命の障害物、対立物であると同時に、生命の創造を可能とする手段でもある。物質は、様々な傾向が浸透し合った意識や生命の連続を区別し、個体化するとともに、かかる過程において努力を誘い、努力を可能にする。ベルクソンは生命の根底に努力を置き、努力を何よりも重んずるが、努力を要求するのは、意識や思考が自己を物質的に実現する過程である。この努力のうちに、我々は現在持てる以上の力を自己から引き出し、自己を高めるのだという。この努力は物質がなければ可能ではないとも、ベルクソンは言っている。物質は、同時に障害であり道具であり、刺激である。⁵¹そして、障害の中での創造を現実⁵¹に可能ならしめるのは、物質世界での行動の中で新たなメカニズムを身につけて行く生ける身体にほかならないのである。

結 語

まず心的なものの純粹な在り方を探ろうとするベルクソンにとって、身体的なものは、これに混入する不純物であり、形而上学の障害でしかない。純粹に心的な実在は、身体性を排除したところに求められる。この障害は、空間内での身体の広がりから、行動の要求、知性的認識へと発展して行く。

しかし、心の在り方を知ろうとする際に付きまとう身体の障害をつきつめるならば、この批判は日常的認識への身体介入の仕方、すなわち精神の活動における身体の役割をあらわにすることとなる。認識論はかかる身体の働きを考慮に入れなくてはならない。

それとともにこの認識論は、常に身体の態度に目を向けるべき精神の在り方を明確にする。精神実在は純粹な状態から離れて身体との関係という現実において捉えられることになる。

身体を契機とすることした発展のうちに、純粹持続の概念の示すものは、夢の状態から、身体の行動という一点における精神の集中へと変貌する。逆に夢の世界は瞬間の世界と同様に意識の弛緩とされ、意識の緊張である純粹持続の対極に置かれるのである。

更に、純粹持続という理想の精神性は、精神と物質との不毛の対立を、存在の精神性と物質性との区別に置き代えることによって、より現実の中で捉えられ得る。我々は現実には物質性にも精神性にも傾き得るからである。ここで、ベルクソン哲学の先の展開のうちに培われた、行動へと身構える身体概念が、現実の中での理想の実現を、あるいは可能とするであろう。物質界の中に生きるという現実には捕われた一つの究極には純粹な同質性、すなわち物質性の

定義となる純粹な反復がある。他方、緊張、収縮の極限には永遠がある。それは「死の永遠」という概念的永遠ではなく生の永遠⁵²である。永遠には及ばずとも、精神性とは、身体の態度に向けてできる限りの過去を不可分に集中する記憶の働きである。

既に『笑い』に見たように、身体は物質性に任されるなら、ぎこちない滑稽なものとして現れる。しかし生命を具現するならば、身体は優美なものともなる。優美は生ける身体を透視して認められる生命の炎そのものであり、物質性の中に移行する非物質性であるという⁵³。生ける身体 *le corps vivant* とはまさに精神性、生命を体現するものである。

純粹持続、精神性といったものは、身体とともにある時にこそ、實在となるのである。ベルクソン哲学にこのような発展があったとするなら、身体への着目こそがその契機であったと考えられるのである。

注

- (1) 湯浅泰雄『身体―東洋的身心論の試み―』（創文社・一九七七年）第三章参照。
また、中村雄一郎『共通感覚論』（岩波・一九七九年）にも同様の評価が見られる。（一二二頁参照）
- (2) cf. Bergson, *Matière et mémoire*, P.U.F. (以下 M.M. と略す) p. 121
- (3) Bergson, *La pensée et le mouvant*, P.U.F. (以下 P.M. と略す) p. 79
- (4) cf. M.M. p. 106
- (5) *ibid.* p. 198
- (6) cf. Bergson, *Le rire*, P.U.F. p. 22, p. 38, p. 60

- (7) Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F. (ライ D.I. ヲ監ト) p.103
 - (8) cf. P.M. p.211
 - (9) D.I. p.26
 - (10) cf. *ibid.* pp.31-32
 - (11) cf. *ibid.* p.6
 - (12) cf. M.M. p.9
 - (13) *ibid.* pp.160-161
 - (14) *ibid.* p.205
 - (15) cf. *ibid.* pp.222-223
 - (16) Bergson, *L'Évolution créatrice*, P.U.F. (ライ E.C. ヲ監ト) p.298
 - (17) *ibid.* cf. P.M. p.214
 - (18) cf. M.M. p.89, p.101
 - (19) cf. M.M. *ibid.* p.114
 - (20) *ibid.* p.133
 - (21) cf. Bergson, *L'énergie spirituelle*, P.U.F. (ライ E.S. ヲ監ト) p.96
 - (22) *ibid.*
 - (23) M.M. p.193
 - (24) cf. *ibid.* p.6
- この点について、更に『道徳と宗教の二源泉』には興味深い一節が見られる。「……知覚に現実性を与え、それを記憶や

- 想像から区別するものは、何よりもこの知覚が身体に刻みつける生まれかけの運動全体であり、この運動は自動的に開始される行動によってその知覚を完成する。しかし、この種の運動は知覚とは別の原因によっても素描されることがで
 できる。この運動の現実の力 *actualité* は、運動の機縁となった表象へと逆流し、この表象を事実上、事物と変わらぬも
 のとするであらう。」(Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, P.U.F. (以下 D.S. と略す) p.213)
- (26) D.I. p.33, cf. *ibid.* p.13
- (27) cf. M.M. pp.176-179, P.M. pp.56-57
- (28) E.C. p.228
- (29) cf. M.M. p.30
- (30) 『哲学的直観』の中でベルクソンはバークリの観念論を評価して次のように言っている。「バークリの観念論の意味するところ
 は、物質は我々の表象と広がりと同じくすること、物質には内的なものや背後的なものはないこと、物質は
 何ものも隠さず何ものも覆わず、どんな力も可能性も持たないこと、物質は外に向き出しになっており、その示すもの
 以上のものでは決してないこと、これらです。」(P.M. p.127)ベルクソンの「形像」にも、この解釈がそのままあてはまると
 思われる。
- (31) cf. M.M. p.43
- (32) この点について『二源泉』は我々の身体と宇宙とにそれぞれ「極小身体 *le corps minime*」と「大身体 *le grand corps*」
 の名を付して触れている。我々の意識が対応する物質を身体と呼ぶとするなら、それは意識と広がり等を等しくし、星に
 まで達するものである。「我々は、自身のうちの絶えず変化している部分、潜在的行動のみが座を占める部分を介してで
 はあれ、我々が知覚するすべてのもののうちに現実に在るのである。」(D.S. p.274)
- (33) M.M. p.29

- (34) cf. D.I. p. 80, p. 89
- (35) cf. *ibid.* p. 71
- (36) M.M. p. 235
- (37) cf. E.C. p. 217, et suiv.
- (38) *ibid.* p. 190
- (39) M.M. p. 188
- (40) cf. D.I. p. 94
- (41) cf. M.M. p. 193
- (42) *ibid.* p. 170
- (43) E.S. p. 108
- (44) E.C. p. 202
- (45) cf. M.M. pp. 247-248
- (46) cf. *ibid.* pp. 248-249
- (47) *ibid.* pp. 249-250
- (48) E.C. p. 246
- (49) cf. *ibid.* p. 128
- (50) cf. *ibid.* p. 264
- (51) cf. E.S. pp. 22-23
- (52) P.M. p. 210

(53)

cf. "Le rire" p.22, p.38

(博士課程学生)